



保存会の会員は春先、みっちりと稽古をして1年間、あちこちで神楽舞を披露する。「見物客の喜びが演じ手の喜び」と話す城戸会長

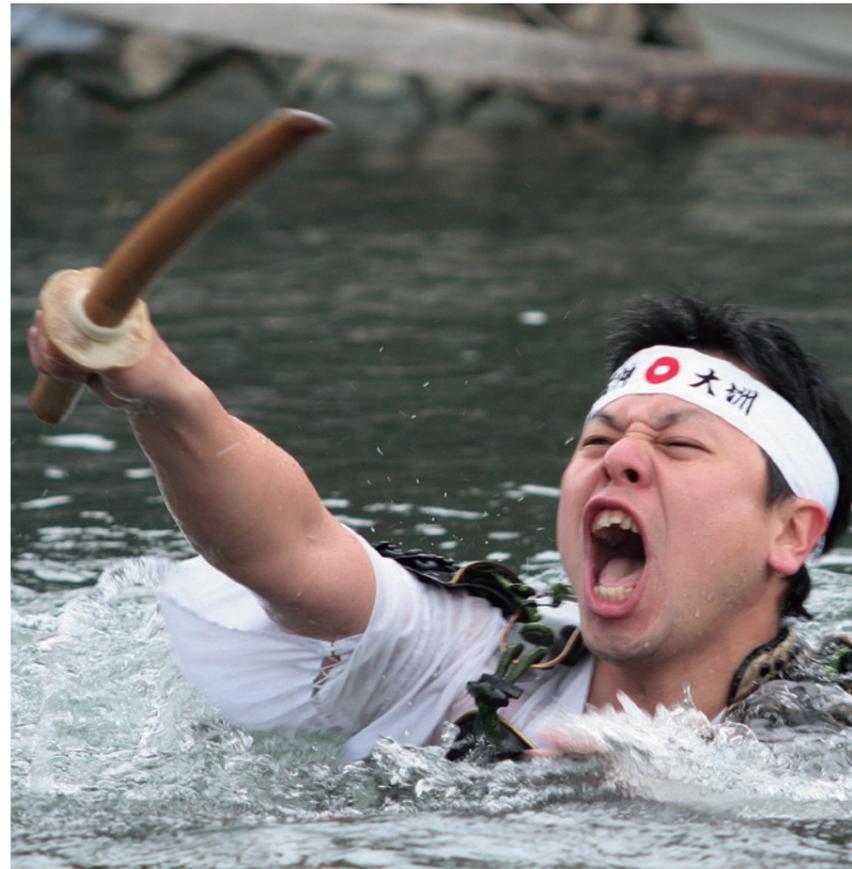
およそ500年前に始まったとされる山鳥坂鎮繩神楽は、昭和45年に愛媛県の無形民俗文化財に指定されました。代々、肱川の支流の河辺川右岸に住む住民が天満神社や三島神社に奉納してきたもので、現在では地元だけではなく市外でも上演されており、その数は年間で40回を数えています。最も大勢の見物客で賑わうのは、旧暦10月の最後の亥の日、松島神社の例祭(乙亥まつり)で行われる奉納神楽。かがり火の幻想的な明かりのもとで行われる剣の舞や八岐大蛇退治などの演目は、今も昔も里山に住む人々にとって大変な楽しみとなっています。

## 幻想的な時代絵巻が魅了

山鳥坂鎮繩神楽保存会 会長 城戸寿賀傷さん



神楽の演じ手である保存会には、11名が所属しています。中には30代の若手もいるので心強い限りです。また、市内の小学校に出向いて、日本の神話に基づいた演目の上演も行っています。こうした活動により、幅広い世代に興味を持ってもらいたいですね。



大洲神伝流は合戦用の泳ぎであるため、正式には前を向いて敵と向かい合って泳ぐのが特徴。そのため「あおり足」という独特の足の使い方をします。「浮力の小さい川で、およそ7キロもある甲冑や鎧を身にとって泳ぐのは決して容易いことではない」と今井会長

## INTERVIEW ふるさと大洲への ラブレター

大洲神伝流は元和3年(1617)、大洲藩初代藩主加藤貞泰公の従兄弟である加藤主馬光尚が創設しました。当初は創設者の名にちなみ、神伝主馬流と呼ばれ、武術の一つとして武士たちは肱川で修練を重ねました。現在、日本泳法は12の流派が公認されていますが、神伝流はその中でも3本の指に入る普及率を誇っています。まず大洲藩から松山藩に渡り、「坂の上の雲」に登場する松山藩の水練場、お囲い池で盛んに練習が行われたそうです。それが全国に広がっていき、現在は新潟、東京、神戸、津山、広島、九州など各地で神伝流が受け継がれています。これほど歴史のある大洲神伝流ですが、地元の人々がその大切さを忘れてるのは残念なことです。この泳法を受け継ぐ者は30名足らずで、成人の日の寒中水泳で披露している

## 藩政時代からの宝を未来へ

大洲神伝流保存会 会長 今井 要さん



ですが、それだけでは不十分。そこで、八幡神社のお練りに甲冑を身につけ、幟を持って参加するなど、地元向けのPR活動を始めました。また夏期水泳学校や水泳教室の開催により、後継者の育成にも力を注いでいます。全国に残る日本泳法でも、川で水泳学校を開くのはここ大洲だけ。神伝流は肱川で生まれ、愛媛県の無形民俗文化財の指定も受けています。このような大洲神伝流を、わたしたちは大洲の大切な宝として受け継いでいきたいと思っています。

長浜の沖合13.5キロに浮かぶ青島は、江戸時代初期に、播州坂越村(現在の兵庫県赤穂市)の与七郎が16戸を率いて移り住むまで無人島でした。この先人たちが故郷を懐かしみ、無聊の日々を慰めるために始めたのが、昭和40年に愛媛県無形民俗文化財に指定された青島盆踊りです。当初、盆踊りは2日間に渡って開催されており、8月14日は亡くなった方々を供養する亡者踊り、翌15日には大漁祈願の大漁踊りを、氏神様の前で踊り明かしていました。樽太鼓を中心に、口説き(歌詞)に合わせて勇壮優美な装束を身につけた島民たちが、赤穂四十七士や賤ヶ岳七本

## 記録と記憶に残したい

青島盆踊り保存会 会長 紙本英則さん



槍、那須与一などを踊る様は圧巻。貴重な文化遺産として注目を集めてきました。ところが近年は島民の高齢化や減少により、平成22年度は試験的に1日だけ開催しました。保存会では、長浜自治会・長浜中学校のみなさんと一緒になって、地域全体でこの盆踊りを継承していけるよう取り組んでいます。



「将来的には今までと同じように盆踊りを披露することは難しいかもしれない。だからしっかりと記録を残したい」と紙本会長は話す